

シリーズ 商学部 50周年

10 <最終回>

商学部の魅力や伝統を65(昭和40)年に商学50周年は、今号で最終回。最後は佐々木重人学部長のインタビューで「チャレンジし続ける。商学部の過去、現在、未来についてお聞きした。」

旺盛なチャレンジ精神 「実践力」身につける

50年の歴史のなかで商学部は、どのような特徴を持った学部でしょうか。

商学部は「産みの苦しみの連続」という歴史的経緯があります。特に、専修大学が1949(昭和24)年に新制大学として再出発する際、学内の「建設委員会」は、それまでの大学専門部にあった商科と計理科を再編して商学部を設置すべきと答申しました。

「心算を学生に吹き込んでいきたい」と思い込んだ商学部自身も「改革を躊躇しない」学部として、専修大学の発展に貢献したいと思ってきました。商学部での学びの本質は、実践力にあります。特にゼミナール担当教員の問題意識も大きく影響していると思います。基本的な知識や理論を学ぶだけでなく、それが市場の現場でいかに活用できるか、学生に体験してほしいと先生方が願っていることが、結果として学生によるさまざまなチャレンジにつながっているのではないかと。

近年、商学部の教員が関与している社会性開発研究センタープロジェクトで、アジア、とりわけメコン地域の大学の研究者との共同研究が盛んになっております。学生も含めて相互に専門分野のコミュニケーションを深めるため、英語を共通言語として選択。さまざまな専門分野の教員による指導を通じて、市場研究と会計研究を包括的に学んでもらい、オーラウンドな企業人、組織人としての潜在力を身に伸ばすことを目指しています。50周年企画として、国際会計基準が「単一で高品質の会計基準」と考えられるようになりつつあります。その基準は、英語によって発信されているので、その解釈能力を向上させることが必須となっております。学部生は学外のチャレンジプログラムなど、卒業生と学生を結びつける機会を増やしたいと考えています。卒業生の方々と地域社会にどう関わりたいのか、現存する商学部の新カリキュラムを展覧すべく、現在検討しております。

佐々木重人学部長に聞く



▲前列左から6人目が佐々木学部長。5人目・甘竹秀雄さん(昭33商経)、4人目・中俣善也さん(平4商)ら商学部の校友、学生、教員に囲まれて1月、生田キャンパスで

6大学民法討論会で2位

法学部 中川ゼミ



▲左から吉垣さん、田口さん、中島さん、中川教授、中野さん、水瀬さん

知学院、國學院などの各大学から8チームが出場し、2つの事例を検討。中川ゼミは貸付マンションの契約解除に関する事例で家主(貸付人)側の主張を熱弁した(1位は亜細亜大学チーム)。出場メンバーはゼミ長の吉垣祐希さん、中野絵美さん、中島航さん(いずれも3年次)と4年次生の水瀬圭祐さん、田口実奈子さん。水瀬さんと田口さんは2年連続出場。討論会では各チームの発表者が論旨を説明した後、貸付契約書の「クリーニング条項」「礼金支払い特約」「更新料条項」をめぐる質疑応答を展開。「事例をもとに法律を解釈するのは初めで、先輩方のアドバイスを的確に論理を積み上げることができた」という。

商・伊藤教授 2学会で受賞

伊藤和憲商学部教授の『BSCによる戦略の策定と実行』事例で見るインターネットと統合報告への管理会計の貢献(同文館出版)が、今年度の日本原価計算研究学会の学会賞と、日本管理会計学会の学会賞(文献賞)にそれぞれ選ばれた。

エチオピアでスポーツ支援

小山さん(経済3) 青年海外協力隊員に



▲今夏、海外の陸上競技大会(I AUM)で二十種競技に出場。右端が小山さん=エストニアのタルトツで

経済学部国際経済学科の狐崎知己ゼミで学ぶ小山哲介さん(3年次)が、JICAボランティアの青年海外協力隊派遣試験に現役合格し、2016年1月、エチオピアに向かう。2年間、首都アディスアベバを中心に、スポーツの人材支援を目標に活動する。

「大学2年次まで励んできた陸上競技の経験や狐崎ゼミで学んできたことを生かし、現地の子どもたちに走る楽しさを伝えたい」と目を輝かせた。愛知県額田郡幸田町の出身。蒲郡東高時代は800mを中心にリレーや駅伝に出場。専大入学生後も陸上競技部員を目指し、部員と練習に励んだが「距離のターゲットを絞りたい」と断念した。

発展途上国の経済が専門の狐崎ゼミに入ってから世界に目を向け、途上国への協力に目覚めた。そんな中で青年海外協力隊に応募。「2年間の休学になるが、やりたかったタイピングを逃したくない」。狐崎教授に報告したところ笑顔で激励してくれた。「自分も走る喜びを取り戻したい」。ローマ(1960年)、東京(64年)の五輪で優勝したアベベ・ビキラマランの大選手を数多く生んだ陸上王者エチオピアでの活動を楽しみにしている。

専修人の新しい本 特許政策の経済学 理論と実証 山田節夫著

かつて福沢諭吉が『西洋事情』において「発明の免許」と紹介した諸外国の特許制度。日本では1871年に最初の特許法「専売特許規則」が公布され、1959年に現行の「特許法」が制定された。本書は、特許を法学的観点から捉え、経済政策の観点から捉え、その「特許法」が制定された。本書は、特許を法学的観点から捉え、経済政策の観点から捉え、その「特許法」が制定された。本書は、特許を法学的観点から捉え、経済政策の観点から捉え、その「特許法」が制定された。

現代青森県の政治(上) 1945-1969年 藤本一美著

藤本一美著

本書は戦後から高度経済成長期における青森県の政治、社会動向を一年ごとに分析、従来の青森研究と比較して裾野を広げて分析しているのが特色である。上巻では、①津島知事から竹内知事の県政運営、②国政選挙や知事選挙、③各種地方選挙の結果、④県議会の動向、⑤社会的象徴などが扱われている。この中で、リンゴの県経済への影響力の大きさを示す一例として「リンゴ税」(リンゴ取引税)を取り上げている。国の税制改革で廃止されたが、戦後間もない時期に県財政はこの貴重な財源に支えられ黒字であった。

著者は2014年春に本学を定年退職、生まれ故郷の青森県五所川原市に帰郷し、「青森県の政治に疎かった」と反省。「青森県の政治史を解明してみたい」と話している。続けて中巻、下巻を出版する予定。(志學社・2500円+税) 著者(ふじもと・かずみ) 専修大学名誉教授、元法学部教授。専門は、米国と日本の現代政治。